



HPV（子宮頸がん）ワクチン 副反応について

私の身体に起きたこと

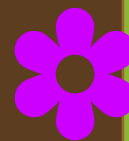
～接種後の13年間～



接種前（小学生の頃）の私



運動会



PIC•COLLAGE

東京原告56番

栃木県
足利市 在住

くらかみ まりか
倉上 万莉佳
(25歳)

HPVワクチンを接種したのは、
小学6年生(12歳)の時

それ以降、徐々に体調を
崩し始めました



接種後に現れた症状 (小6～高校生)



最初に起こった異変は
「異様な倦怠感」と「月経不順」

最初に起こった異変 1 「異様な倦怠感」

ワクチン2回目接種の後、怠さのために水泳教室で泳げなくなる。



水をかく手に力が入らない、一つ一つの動作が重い、呼吸が続かない、



個人メドレーまで上達していたのに、周回遅れで迷惑をかけてしまい、水泳教室をやめざるを得なくなった。

(当時は病気や症状とは思わず…)

最初に起こった異変 2 「月経不順」

ワクチン 3 回目接種の後しばらくして、 生理が半年間止まる。



その後は、2ヶ月に1回(過少)、2週間に1回(過多)、
10日～3週間だらだらと続くなど、

全く周期の定まらない月経不順になる。



この月経不順は、13 年経った今でも続いている。

頭痛

めまい

吐き気

多汗

倦怠感

疲れやすい
体力が落ちる

腕がブルブル
震える

医療機関を受診するが、検査をしても原因がわからず…

ワクチンの副反応という発想はなかった

= 自分は皆よりも体が弱いだけなのかな??



中学生に
なってからも、

様々な症状
が出るように
なっていました

記憶力
の低下

光過敏

物忘れ

会話がわからなくなる
(日本語じゃないみたい)

* 原因がわからない以上、
自己管理や対策をするしかない…

その後も
増え続ける
症状たち…

原因に
なかなか
気づけなかった

高校生以降も、症状は悪化の一途をたどる…

今まであった症状は『悪化 & 頻度が増える』
月経不順、めまい、吐き気、多汗、倦怠感、
記憶力の低下、光過敏

+

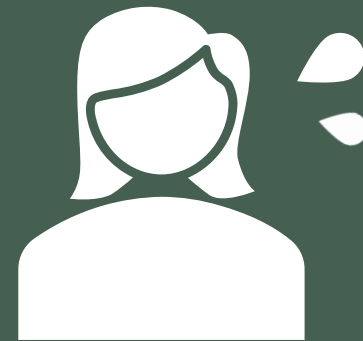
加えて、
感音性難聴、不眠の症状、頭の締めつけ感、
足の指先が冷えすぎて紫色になる、
頭重感、胸の圧迫感、座位が保てない、
文章を読む・処理する速度が遅くなるなど…

自律神経・内分泌系障害

認知・情動系障害

感覚系障害

運動系障害



積み重なっていく
「多様な症状」

高校 2 年生の夏休み明けに、突然朝起き上がれなくなり、
私の人生は 180 度変わってしまったのです。

人間の体に電源ボタンや回線があるとしたら、
それをオフにされて断ち切られてしまったかのように、
自分の意志で自由に動かせなくなってしまったのです。

**身動きも取れないような状態になって初めて、
原因に辿り着くことになる**



HPVワクチン薬害

～ 副作用にとどまらない「被害の実態」 ～



問題点 1

医療機関に副反応が周知されていない、
診察や治療の対応ができないという現状

メディアの情報により、

私の症状が「HPVワクチンの副反応」と

同じであることに気づいた母

しかし・・・

厚生労働省より指定されている

「協力医療機関」

(HPVワクチン接種後の症状を
診療する病院)

で言われたのは…

「真面目な子になりやすく、
こんなことを騒いでいるのは
日本だけだよ」

* 実際には、
他国でも接種後同ような症状を訴えている人が
多くいて、訴訟が起こっている国もあります。

母の相談のみで、私は診察すらしてもらえませんでした

最終的には、「不登校ですね」と言われ、
診察券も作ってもらえず…

当時、そのやり取りを知らずに、
何とか学校へ登校しようと頑張っていた私は、
とても大きなショックを受けました

助けてもらえると思って頼った場所からも
頭ごなしに否定され、
私と母の心はズタズタに…

医療はもっと優しくて、病気で困っている人に
寄り添うものだと思っていた

14か所もの病院を
たらい回し

重なっていく
症状の辛さ

誰にも頼れない
心の辛さ





問題点 2

副反応症状に対する
治療法が確立していない

被害者連絡会の助けを得て、

副反応の患者さんを診てくれていた横田医師のもとへ

「HPVワクチンの副反応」と診断を
受ける

親身になって話を聞いてくださった
横田先生の優しさが、
今でも忘れられない。

横田先生には安心して、
症状や困っていることを
打ち明けることができた。

「治せるかもしれない！」

手を差し伸べてくれる人たちの
おかげで
一筋の光が差した

親身になって
助けてくださる

医師の先生方、
連絡会の仲間、
議員さんの

優しさ
思いやり に
救われる

入院した時の様子 (高校3年生)

「免疫吸着療法」によって、
頭痛、めまい、胸の圧迫感
などが改善



しかし、私はまだ、
薬害の本当の苦しみを知らなかった

辛い治療を頑張れば、学業に復帰できると
思っていた私に待っていたのは、
「暗く先の見えない過酷な道のり」

私は治療に辿り着くのが遅かった部分もあったのか、

強い倦怠感や、睡眠障害、認知機能の低下などの
他の症状が手強く、

全ての症状を改善させることができなかった。

根本的な治療法というのは、いまだ確立していない…。



問題点 3

人間らしい人生を歩めなくなる

重い被害

「友達と一緒に卒業したい」

学校側の配慮を得られたことで、
何とか、同じ年に高校を卒業できた

しかし、大学受験はできなかった…

(様々な症状を耐えることで精一杯の毎日だった)



日常生活の困りごと

～ 症状を抱えながらの生活 ～

特に「つらい、困る」と感じるもの3つ

- ①強い倦怠感、疲労感
(体力が少ない)
- ②認知機能の低下
- ③睡眠障害

①強い倦怠感、疲労感（体力が少ない）

- ・ 自分の上に「人が5人乗っかっている」ような感覚
→ 座位が保てない・ベッドから起き上がれない
- ・ 3日間や長いと1週間、休まないと
疲れが回復できない

（健康な人の体力が100なら、私は10～20くらい...）

- ・ 毎日お風呂に入れない（ひどい時は週 1、2回）

＊ いっそ、坊主にしようかと悩んだ日も…

「頭を洗うためのシャワー日」、「湯船につかるだけの日」、「足湯だけの日」と

分けて工夫

- ・ 2時間かけて食事をする＆途中で休憩を挟む

（飲み込み、咀嚼すらも疲れてしまう） ＊ 食べることも苦痛に…

- ・ 遠い距離、長い時間の活動は気持ち悪くなるほど疲れてしまう

25歳でも、一人で外出がなかなか叶わない…

②認知機能の低下

- ・文章の同じところを何度も読み直す
- ・急に言葉が出てこなくなる
- ・会話や意味を処理できない
- ・すっぽりと抜け落ちて忘れる



- ・ 認知機能の症状にムラがある
常にあるわけじゃないから、とてもわかりにくい
- ・ 返事ができない、答えられない
冷たくて愛想の悪い印象になると、人間関係が狭まってしまう…
- ・ コミュニケーションができないのはもどかしい
頭が働かないだけで、口を塞がれているような気持ちに…



③睡眠障害

- 眠気が、朝も昼も夜もずっとある
(夜は眠くても、眠りに落ちることができない)
- かと思えば、
突然意識を手放すように眠くなる、
1日に14～15時間も眠ってしまうこともある

『全くコントロールできない睡眠のサイクル』

- ・ 明け方から昼間が一番寝られる時間になってしまう

でも、昼間に起きてないと活動が何もできない

* 一睡もしないで仕事に行く日もある（その日の運転は控えるしかない…）



- ・ 眠すぎて作業に集中できない、何もできない日もある

ずっと睡眠不足みたいで、頭がボーツとしてスッキリ晴れない
あまり心地いいことではない…。作業効率も下がる…。



体調に左右されながら、
物事を決めなくてはならない毎日。

予定をびっしり埋めて、もっと活発に動きたい。

達成できないことが、もどかしくて辛い。



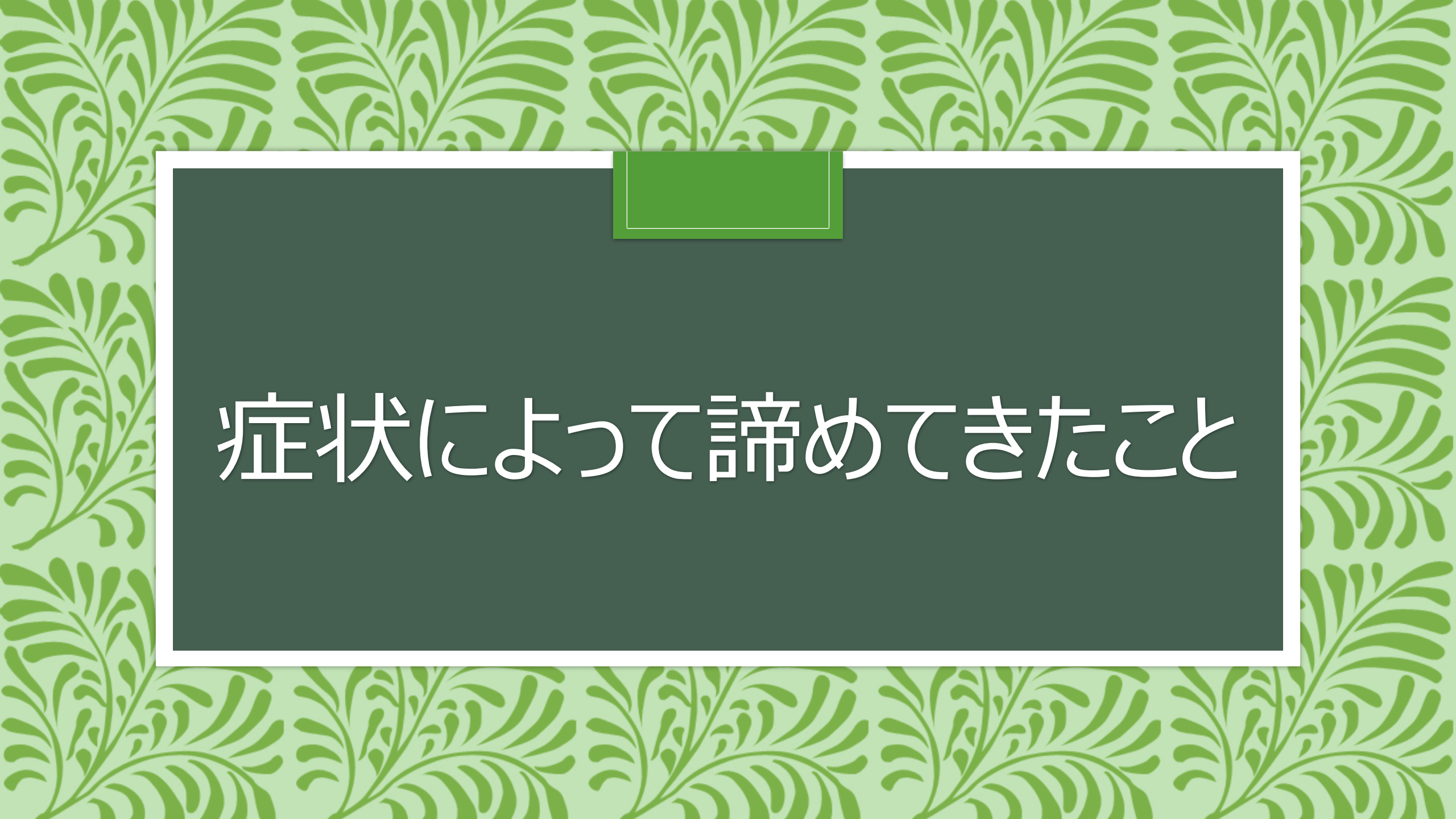
日常生活の困りごと

～ 症状を抱えながらの通院 ～

副反応症状を診られる病院、先生方が遠方にいる

- ・ 私の通う病院も、症状を考慮すると前泊が必要
(医療費に加え、宿泊費・移動費・食費がかさむ...)
- ・ 症状を持った人が移動する『**身体的負担**』や、
支える家族の『**経済的な負担**』も計り知れない

病院に通う問題が、生活を圧迫している



症状によって諦めてきたこと

大学に通う生活を断念…

『人々の健康をサポートする仕事がしたい』

『誰かの役に立てる人になりたい』

想像していた「憧れの大学生活」

- ・ 自分の知りたいことのために研究室にこもる
- ・ 学生寮で一人暮らしをする
- ・ アルバイトをしたり、可愛い服を買いたい。

好きなこと、趣味も楽しめず...

ステロイドの副作用「ムーンフェイス」や、
「皮膚症状」の悪化により、
鏡も見れなかった時期があった



顔はまんまる、体はガリガリ...



〈皮膚症状〉

顔、首、背中、脇、肘裏、手の甲、
腰回り、もも裏、膝裏など…

全身が傷だらけ、
黄色い浸出液が出ていた



皮膚症状が収まった後も、
色素沈着や傷跡が残ってしまうのが悲しかった



車椅子や杖で出かけた時の写真



オシャレが好きなのに、
出かける前の準備で
疲れてしまうことも...



症状があっても、人生を楽しく生きたい

どんなに体調が悪かったとしても、オシャレを楽しみたい



元気じゃなくても、お出かけしたい



せっかく女性に生まれたなら、可愛くいたい



「小さな楽しみを見つけて生きていきたい」



問題点 4



わかりにくい症状たち

車椅子と杖の葛藤

- 私が車椅子や杖を使うのは、
「強い倦怠感」のため
- 長距離の移動、3時間を超える活動からは
杖や車椅子が必要になってくる

車椅子と杖の葛藤

きちんと伝えても理解が得られないと、
「怠け、甘え」と捉えられてしまう...

ひどい時には、「演技だ」という人も

車椅子や杖を自分に許せるようになったのはここ最近

「自分は健常者になろうとした」
(薬害スモン被害者の方の言葉)

体がついていかないにもかかわらず、
頑張って立ち続けたり、車椅子を使わないようにして
いた時期の、自分の心情と重なりました。

車椅子と杖＝「体力温存と体調管理の一環」

- ・少しでも長く、遠い場所まで動けるようにするため
- ・蓄積されていく疲れを減らして、早く回復するため
- ・活動範囲、時間、日数を増やすため

これは私が8年かかって、やっと自分に許せた
「この体と症状との付き合い方」でした。

遠くまで自分の足で
歩いていけるようになりたい

明るい未来があると信じて
頑張りたい

そんな想いを込めて、
家族と支援者さんと
作りました！



「自分の足で歩きたい」
車椅子と杖に頼らなくても
遠くまで歩いていける自分になりたい
明るい未来、希望を目指して、私は走る！



足利市に住む倉上万莉佳（25）です

プログラム

- ◆HPVワクチンのドキュメンタリー
- ◆私の身体に起きたこと 接種後の13年間
- ◆問題の背景 わかりやすい解説

お問い合わせはこちら

HPVワクチン東京訴訟支援ネットワーク <https://hvp-yakugai-shien.net/>
☎090-3682-1767（江川）

2024.4.28（日）14:00～16:00

あしかがフラワーパークプラザ オンラインでも参加可能です
足利市民プラザ 西館301号室
足利市朝倉町264番地（足利市駅から徒歩12分）

お申し込みはこちらへ
<https://x.gd/91fmq>



入場
無料



問題点 5

薬害は人災

薬害は人災

副作用（副反応）は、薬が起こすもの
薬害は、人が起こすもの

私たちの被害は、
「医療・政治・メディアなどの
良心が失われた先にあるもの」です。

知らなかった、予期できなかった被害ではない

リスクを正しく知らせてもらえたら、
厚生労働省が止めてくれたら、未然に防げていたもの

お勧めされている今も...

- 薬液は改良されていない
(9価ワクチンはリスクがより高いのでは)
- 重い副反応症状の治療法は確立していない
(早期治療に辿り着ける体制になっていない)

被害当事者や医師への批判・圧力がある

この問題を解決しようとする、
「HPVワクチンを推進したい人からの
批判が集中する」

当時、子供だった被害者の人たちを相手に、
バッシングしてくる大人がいることに驚きました

私も匿名だったけど、実名公表を決意

～下野新聞さんに掲載して頂きました～

- ・ 番号だけでは被害の実情が伝わり切らない悔しさ
- ・ 「私と家族の覚悟のあらわれ」
- ・ 「隠れないで堂々と同じ社会で生きていきたい」

批判を
受ける



諦めない！
一緒に
頑張ろう！

少しの
研究費

それでも諦めずに、
私たちに長年寄り添ってくださる先生方ばかり。

きちんと治療を受けられないことに
憤りを感じ、異議を唱えてくれている



証人尋問に立った 先生方の言葉

— 全国の被害者に寄り添う「仁」の心 —

2023年5月18日 証人尋問にて

「画像にうつらないから、
自分が経験したことがないから、

心身の反応だという結論を
出すことは、

医学者として
一番やってはいけないことだ」

暗闇の中を、光で照らしてくれるような言葉でした



池田修一
先生

信州大学
名誉教授

副反応の患者
約200名を
診察している

神経難病の
専門医

2023年6月5日 証人尋問にて

「これは大人の責任だ。
医療従事者の責任だ。」

私は彼女たちを放り出すことが
できない。

失った青春を
取り戻してあげたい」

背中を押してくれる温かい言葉に、涙が出ました



横田俊平
先生

横浜市立大学
名誉教授

副反応の患者
約150名の
臨床経験がある

小児難病の
専門医

2023年7月3日 証人尋問にて

「私は原因を見つけるのが得意で、
すぐに自己免疫とわかった。

早期治療をすれば、早く治った。

心因性ばかりが採用され、
原因究明、早期治療が
できなくて虚しくなる」

「私たちを助けてい」という想いが強く伝わる言葉でした



高嶋博
先生

鹿児島大学病院
医学部教授

日本で
最も大きい
脳神経内科

脳炎・脳症の
専門医

6人の先生方の尋問

あるべき
医療の形

患者さんに
寄り添う
姿勢

「免疫介在性の神経障害」

治療や病態の研究が進まないと...

- ・ 副反応にあった人を助けられない
- ・ 人体に対するリスクもわからない

尋問に立った先生方のやっていることは
間違っていない

流れてくる情報だけが、全てではない

被害の実態は、調べてもなかなか辿り着けない。
かなり情報が隠されている。

HPVワクチンのことを
皆に知られたくないからではないか？

国や製薬会社は「心因性」の一点張り

裁判や交渉の場に参加してきて思うのは、
国と製薬会社の不誠実さ

10年以上、被害が解決していない現状

訴訟は8年目だが、
メディアで取り上げてもらえることも少ない

薬害は個人の問題を越えた「社会問題」

- ・ 症状に苦しむ人たちを放置し続けるなんて、
「社会的ないじめ」ではないか？
- ・ 「心の問題」と誤解を招くレッテルを貼られて、
「人としての尊厳も奪われている」と感じる

薬害は個人の問題を越えた「社会問題」

自分や、自分の大切な人の健康を守るために

日本で起こっている医療の現状を

正しく知って頂きたいと思います。



最後に
皆さんにお願いしたいこと

知って
ほしい



伝えて
ほしい

支えて
ほしい



「支える」

ぜひ、裁判の傍聴や
原告への応援を
よろしくお願いします

皆さんの声は何よりも
力になります！

HPVワクチン薬害訴訟





最後まで聞いて頂き、
ありがとうございました！